

# 世界の歴史と日本の歴史のつながりを認識する 高等学校地理歴史科の教材開発

——最初の日系アメリカ人ジョセフ＝ヒコ（濱田彦蔵）を事例にして——

田 中 泉\*

## I. 本研究の目的と方法

現代世界は、国家や地域の枠を越えたつながりが、ヒト、モノ、カネの大量かつ迅速な移動によって一層緊密になりつつある。その理解のためには、最早、単なる国家間あるいは地域間の関係としてのインターナショナルな概念ではなく、世界全体を視野に入れたグローバルな概念が必要となっている。そうした中で、現代世界の基本構造と変動について、歴史的に認識する必要性が高まっている。

一方、日本においては、近年の経済状況の停滞や人口の減少傾向による閉塞感が強まり、20年くらい前と比べて、若年層を中心に内向的で、世界に視野を広げることに消極的な人が増えている。この傾向が続き社会の活気が失われれば、明治維新以降の日本が進めてきた社会的発展は停止してしまうかもしれない。

そのような意味で、世界と日本のつながりを意識することは重要であろう。今ほど、学校教育において児童・生徒に対しグローバルな社会認識を育成する必要性が高まっている時期はないと思われる。

そこで、本研究では、世界の歴史と日本の歴史のつながりを認識させる高等学校地理歴史科の教材を、ジョセフ＝ヒコ（Joseph Heco）という人物を事例にして開発してみたい。ジョセフ＝ヒコは、1837年に播磨国（現在の兵庫県南部）

で生まれ、幼名を彦太郎といい、13歳の時に船乗りとなったが、初航海で嵐のため難破・漂流し、アメリカ船に救助されて、アメリカに入国後、キリスト教の洗礼を受けた。ジョセフとは洗礼名である。のち、アメリカ国籍に帰化して、最初の日系アメリカ人として日本に帰国し、さまざまな経験をし、晩年に濱田姓の日本人女性と結婚して濱田彦蔵と名乗った。

この人物は、アメリカでは南北戦争を、日本では幕末の攘夷運動と明治維新を経験しており、世界と日本の歴史のつながりを認識させる事例として適っている。また、彼には、『自伝』が残されている<sup>1)</sup>。そこには、激動期をアメリカと日本で生きた人としての心情が余すところなく吐露されており、そのアイデンティティの変化を認識することは、前述したような激動期の現代世界に生きる日本の児童生徒に多くの示唆を与えてくれるものと思われる。

本稿では、まず、学習指導要領における世界の歴史と日本の歴史のつながりについての考え方を明らかにしたのちその背景を考察し、筆者の認識を示す。次に、ジョセフ＝ヒコの生涯を分析して教材開発の意図を明らかにし、開発した教材の事例と実践した授業について報告する。

## II. 学習指導要領が求めるもの

### (1) 学習指導要領改訂の趣旨

高等学校の生徒に世界の歴史と日本の歴史のつながりを認識させる重要性は、平成21年3月9日に改訂された高等学校学習指導要領（以下、

\* 広島経済大学経済学部教授

「新学習指導要領」と表記する)の解説において、「地理歴史科の改訂の趣旨」の中で強調されている<sup>2)</sup>。教科全体の改善事項として「我が国及び世界の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を一層深めさせるよう科目間の関連を重視する」ことが求められている。また、歴史系の各科目の改善事項から抜粋した記述内容は以下のとおりである<sup>3)</sup>。

世界史A	日本の歴史との関連に一層留意しながら、諸文明の特質と現代世界の形成過程を理解させる
世界史B	日本の歴史の関連に留意しながら、世界の歴史の大きな枠組みと流れを理解させ、文化の多様性・複合性に関する認識を深めさせる
日本史A	世界の歴史と関連させながら、…(中略)…我が国の近現代の歴史や現代社会の成り立ちについて理解させ、(後略)
日本史B	世界の歴史と関連させながら、…(中略)…我が国の歴史の展開を総合的に理解させ、(後略)

これは、従前の高等学校学習指導要領(平成11年3月29日改訂)より一層踏み込んだ記述といえる<sup>4)</sup>。とりわけ「日本史A」で「我が国を取り巻く国際関係…と関連付けて」、日本史B」で「我が国の歴史の展開を世界史的視野に立って総合的に」と記述されていた<sup>4)</sup>のに比べると、新学習指導要領では明確に世界の歴史とのつながりを重視していると言える。

新学習指導要領における具体的な内容において、「世界史A」と「世界史B」で以下のように、中単元が設定されている<sup>5)</sup>。

「世界史A」:

内容 (1) 世界史へのいざない イ 日本列島の中の世界の歴史  
日本列島の中に見られる世界との関係や交流について、人、もの、技術、文化、宗教、生活などから適切な事例を取り上げ、年表や地図な

どを表す活動を通して、日本の歴史が世界の歴史とつながっていることに気付かせる。

「世界史B」:

内容 (1) 世界史への扉 イ 日本の歴史と世界の歴史のつながり  
日本と世界の諸地域の接触・交流について、人、もの、技術、文化、宗教、生活などから適切な事例を取り上げ考察させ、日本の歴史と世界の歴史のつながりに気付かせる。

このように、世界史では、A・Bとも、何らかの事例から、日本の歴史と世界の歴史の関連に気付き、世界の歴史への興味・関心を持たせようとするものである。一方、日本史では、A・Bいずれにも、世界の歴史とのつながりを認識させる単元の設定はない。

## (2) 学習指導要領改訂の背景

新学習指導要領がこうした単元を設ける理由としては2つのことが考えられる。

1つは、中学校歴史分野の内容による理由である。中学校歴史的分野では、平成元年改訂の学習指導要領において、ゆとり教育推進のために世界史の内容が大幅に削減されている<sup>6)</sup>。このため、高校に入学した生徒にとって、世界史の内容に対して興味関心を持つことが容易でなく、敬遠される原因となっている。逆に、生徒は、小学校の第6学年で人物を中心に簡単な日本の通史を学習し、中学校歴史的分野でも日本の政治・社会・経済・文化を系統的に学習しているため、日本の歴史には親近感を持っている。そこで、世界史学習の導入時期において、日本の歴史との関連から学んで世界の歴史にも興味を持たせようということであろう。

もう1つは、高等学校地理歴史科の科目の履修規則<sup>6)</sup>による理由である。それによると地理歴史科では、『世界史A』及び『世界史B』の

うちから1科目並びに『日本史A』、『日本史B』、『地理A』および『地理B』のうちから1科目を選択して履修することが求められている。つまり、世界史はAかBを必ず履修することが求められているが、日本史は、必ずしも履修せずともよいのである。この点については、日本の高校生が日本の歴史を学習しないことを問題視する意見もある。そのため、日本史を履修しない生徒が少しでも日本の歴史に触れる機会を作ろうということであろう。

筆者は、こうした教科の事情とも言える背景に対しては、異論を持っている。「1. 本研究の目的」で述べたような現代世界の状況および日本の課題に鑑みて、そろそろ日本の歴史と世界の歴史を統合的に学習する時期が来たのではないかとも思われるからである。

過去を振り返ってみると<sup>7)</sup>、明治初期以降、日本の教育において、日本の歴史は歴代天皇の事績を中心に網羅的・通史的に学ぶ皇国史観に拠った。それに比べて外国史は各国史を寄せ集めに近いものであり、日本の歴史が日本人の精神構造の支柱の1つとなり、国民精神を涵養する手段となっていた。特に昭和に入ると、1931(昭和6)年の中学校令では従前の「日本歴史」が「国史」と改められ、また、1937(昭和12)年の中学校令では「日本の歴史を外国の歴史と異なる理由を明確にし、国民的信念を強固ならしめること」を求めているなど、日本の歴史を外国の歴史と峻別してきたのである。戦後においても、その流れを引きずり、日本史と外国史は別の科目であり続けた。

「日本の歴史と世界の歴史を統合する」というのは、単純に日本の歴史を世界の歴史の中に組み入れたり、その逆に、世界の歴史を日本の歴史に組み入れたりするのではなく、世界と日本を一体的にとらえた形での歴史を創造することを意味している。

その意味で、ジョセフ＝ヒコのように、日本

とアメリカの双方で暮らした人物は、その教材となるであろう。交通の発達していない19世紀に、彼が3度にわたりアメリカと日本を往復したというのは、貴重である。もし交通・通信の発達した現代であれば、さらに何度も両国を往復したことだろう。次節では、そうした彼の生涯を分析し、教材開発の論点を示してみたい。

### III. ジョセフ＝ヒコについて

ジョセフ＝ヒコの大まかな生涯については、以下の略年表のとおりである<sup>8)</sup>。

ジョセフ＝ヒコ Joseph Heco (1837～97) (日本名：濱田彦蔵, 幼名：彦太郎) ※年代・日付はすべて西暦	
1837年	9月20日、播磨国加古郡阿閩村古宮(現、兵庫県播磨町)で出生する。
1850年	母の死を契機に、船乗りとなる。乗った「永力丸」が遠州灘で遭難する。52日間漂流したのち、アメリカ船オークランド号に救助される。
1851年	オークランド号で、サンフランシスコに上陸する。
1852年	アメリカ政府の命令で軍艦セントメリー号で帰国の途につく。ハワイ経由、香港へ向かい、日本に向かうペリーの船を待つが、ペリーの船が遅れ、待ち切れず再びサンフランシスコへ戻る。
1853年	サンフランシスコで、税関長サンダースの事務所に就職する。サンダース氏の故郷、メリーランド州ボルティモアへ移る。ワシントンで、当時の大統領ピアースに謁見する。
1854年	サンダース氏の支援でボルティモアのカトリックの学校に入学する。カトリックの洗礼を受ける。
1858年	上院議員グウィン <sup>9)</sup> の導きで、ブキャナン大統領に謁見する。サンダース氏の勧めで、アメリカ合衆国市民権を取得する。測量船に雇われ、サンフランシスコからハワイ経由で上海へ。
1859年	上海で、初代駐日公使ハリスに、領事館通訳として雇われる。長崎を経由して、神奈川に入港し、9年ぶりに日本に帰国する。

1860年	領事館通訳として活躍する。 井伊大老暗殺を知る。
1861年	攘夷事件が頻発し、危険を感じ、再び、南北戦争下のアメリカへ戻る。
1862年	ボルティモアで、南軍のスパイと間違われ、一時、拘束される。 ワシントンでリンカン大統領に謁見する。 再び領事館通訳の職を得て、帰国する。
1863年	アメリカ軍艦の下関砲撃に参加。 領事館通訳を辞め、横浜の外国人居留地で、商社を経営する。
1864年	日本最初の新聞『海外新聞』を発行する。
1865年	横浜で大火があり、長崎に移り、アメリカ人から商社を買収する。
1867年	グラバー商会の傘下に入り、肥前佐賀藩や長州藩の代理人となる。
1868年	明治維新となり、大阪に移る。伊藤博文の支援で故郷の播磨を訪れる。
1869年	大阪造幣局の創設に尽力する。
1872年	国立銀行条例の編纂に協力する
1877年	神戸にて、濱田銀子と結婚し、濱田彦蔵と名乗る。
1888年	東京に転居する。その後、『自伝』を執筆する（1895年刊行）。
1897年	東京で心臓麻痺にて死去し、青山墓地の外国人墓地に葬られる。 墓碑名：浄世夫彦 戒名：高智院法幢浄弁居士

彼の生涯で特筆すべきは、リンカンを含めた3名のアメリカ大統領や明治維新の英雄である木戸孝允や伊藤博文に会っていることである。このことだけでも、彼が世界の歴史と日本の歴史をつなぐ役割を果たし得ることは確かである。

### (I) アメリカ人としてのジョセフ＝ヒコ（アメリカ市民権の取得）

ジョセフ＝ヒコは、日本に帰国する直前に、彼の保護者であったサンダース夫妻の勧めで帰化し、アメリカの市民権を得ている。アメリカ市民権を得た最初の日本人である。明治時代になり、多くの日本人がアメリカに移住するが、

彼ら一世が帰化不能な人々と差別され、土地取得などで大きな不利益を被ったことを考えると、ジョセフ＝ヒコの例は特別である。

1859年に日本に帰国した時点で、ジョセフ＝ヒコは、アメリカ政府の保護下にあったことが、彼の帰国後の経験を特異なものにしている。実際には、駐日アメリカ公使ハリスが、神奈川上陸の際に、外国奉行の酒井忠行に対し、アメリカ人ジョセフ＝ヒコの保護を要求している。鎖国令があった日本では、外国に行くこともまた帰ることも禁じられていたからである。

ジョセフ＝ヒコは、1852年に日本に戻るべく香港に滞在した際に、同様に船が難破しフィリピンに漂着して香港にたどり着いていた肥前国出身の日本人力松に出会い、鎖国を破った者への幕府の厳しい仕打ちを聞いていた。力松は、同じような境遇の日本人数名とともにモリソン号に乗り帰国を図ったが、鹿児島や浦賀で砲撃にあい、帰国することを諦めていたのである。そのことを聞いたジョセフ＝ヒコは、帰国することに恐怖を覚え、また、母の再婚相手の義父や義兄など自分の家族に害が及ぶことも心配したのである。こうした恐怖や心配が、日本国籍を失う不安を上回ったのであろう。何より、ジョセフ＝ヒコは、1854年に、カトリックの洗礼を受け、キリシタンになっていたのである。キリシタンへの処罰が厳しいことも知っていただろう。

ジョセフ＝ヒコより10歳上で、ちょうど10年早く1841年に難破・漂流し捕鯨船に救助されアメリカで暮らした中浜（ジョン）万次郎は、1851年に帰国したが、上陸した鹿児島や長崎で拘束されて踏み絵をさせられた。彼が長期間厳しい取り調べの末、故郷の土佐に帰ったのは、鹿児島上陸の2年後であった。この状況は、万次郎がアメリカ市民権を取得していなかったために生じたのである。

一方、ジョセフ＝ヒコは、帰国後に幕府の取



り調べを受けることもなく、通訳として活動した。しかし、幕府の役人など周囲の日本人から見れば、顔こそ日本人であるが、断髪で洋服を着て英語を話す彼は異邦人として扱われたわけで、当時の過激な攘夷派の人びとから狙われたのも当然と言えよう。このため、一時的ではあるが、アメリカに戻ることになる。

ジョセフ＝ヒコが攘夷派に狙われたのは、幕府からアメリカ人として処遇され、外国人居留地に住むことを強いられたためでもある。彼が帰国した当時、日米修好通商条約によって開港場となった神奈川の横浜村には外国人居留地が設けられていた。外国人は、そこから十里四方までしか、自由に行動することを認められていなかった。アメリカ公使館をはじめ、多くの外国公使館は江戸に置かれたが、横浜から十里以内にあった。ジョセフ＝ヒコは、通訳を辞めたのちは、横浜村で貿易を行う商社を経営したが、故郷の播磨に帰ることは不可能であったのである。

## (2) 歴史の証人としてのジョセフ＝ヒコ

ジョセフ＝ヒコは、その生涯で、アメリカと日本双方で歴史上の事件に遭遇している。それらの事件は一見関わりが無いようであるが、実は関連があり、結果的に、ジョセフ＝ヒコは、世界の歴史と日本の歴史をつなぐ証人となったとも言えよう。

ジョセフ＝ヒコが、3人のアメリカ大統領に謁見したことは、年表からもわかるが、それ以上に、南北戦争という世界の歴史上重要な事件に遭遇したことは、特筆に値する。ただその時期にアメリカにいただけでなく、彼自身がその渦中に巻き込まれていたからである。

ジョセフ＝ヒコが、攘夷運動を避けてボルティモアのサンダース宅に戻り、首都ワシントン郊外のアレクサンドリアにいるサンダースの友人ブーズと教会に行った際、南部側の大統領

のために祈った牧師に対して、北軍の兵士が暴行をしているのに遭遇した。そして、この事件を報道した新聞社が、やはり北軍兵士によって放火された。そして何より、ブーズの友人の家で食事中に、ジョセフ＝ヒコ自身が、南軍の偵察将校と間違われて北軍の憲兵隊に逮捕され、拘束されている。つまり、ジョセフ＝ヒコは、南北戦争の最前線にいたのである。南北戦争で北軍を率いるリンカン大統領に会ったのはその直後である。ジョセフ＝ヒコは、リンカンのことを「きわめてまじめで親切な人間で、接する人びとのだれにも愛されとくに自分の一統や友人からはひどく愛されていたとのことである」と述べている<sup>9)</sup>。

ジョセフ＝ヒコは、帰国した日本においても、幕末から明治維新にかけての諸事件に遭遇し、様々な日本の歴史上の人物と会っている。とりわけ、長州藩の人びととの交流が、明治維新後の彼にしかできない役割を導いたと言える。

最初に帰国した1860年には、日米修好通商条約を批准した書状をアメリカ政府に手渡す使節に同行する幕府の軍艦「咸臨丸」が浦賀をアメリカに向けて出航する準備中に、艦の通訳となっていた中浜万次郎に会っている。中浜万次郎は、ジョセフ＝ヒコのことを知っていて、似通った互いの境遇を話している。

アメリカ領事館の通訳として、公使のハリスや、領事のドールの信頼を受けていたジョセフ＝ヒコは、江戸幕府との交渉過程のみならず、江戸幕府からもたらされる情報も知りえた。例えば、大老井伊直弼が殺された桜田門外の変の情報もいち早く知った。また、領事館員ヒュースケン殺害事件や、イギリス領事館通訳の伝吉殺害事件にも遭遇し、自らも幕府の役人から警告を受け、狙われている雰囲気を感じ取っている。この攘夷運動の激しさを嫌ったジョセフ＝ヒコは、通訳を辞めて、アメリカに戻り南北戦争に遭遇したのである。

アメリカで、南北戦争に遭遇し、嫌気をさしたジョセフ＝ヒコは、再び日本に戻ったが、アメリカ領事館の通訳として江戸幕府との交渉を行っていた。その間、1863年の下関事件に際し、軍艦「ワイオミング号」に乗船して、艦砲が長州藩の砲台を破壊するのを目撃した。しかし、その報復としての攘夷運動が激しくなり、身の危険を感じたジョセフ＝ヒコは、結局、領事館通訳を辞している。

その後、ジョセフ＝ヒコは、横浜の外国人居留地での大火とその後の混乱をきっかけに長崎・大浦の外国人居留地に移った。そこで、ジョセフ＝ヒコは、旧知のフレイザーがアメリカに帰国するのに際してその商社の経営を引き継ぎ、イギリス商人トーマス・グラバーと出会っている。当時、長崎は、艦船と武器の輸入の場であり、グラバー商会は、薩摩藩や長州藩の求めに応じて独占的にそれらを扱っていた。

グラバーは、ジョセフ＝ヒコが日本語と英語に堪能で商業知識があるのに注目し、緊密な関係となった。その関係から、長州藩の伊藤俊輔（後の博文）と桂小五郎（木戸孝允）がジョセフ＝ヒコのもとを訪れ、世界情勢を聞くとともに幕府から敵視されている長州藩の状況を話し、貿易の代理人になるように要請した。ジョセフ＝ヒコは、長州藩の求めに応じて、武器をアメリカから輸入した。これらの武器は、南北戦争の終結によってアメリカで不要となったものである。伊藤は、もともと、攘夷運動の過激派の一人であり、イギリス公使館焼き打ちなどにも加わっていたが、下関事件後、イギリスに密航してロンドンに滞在し、開国派となったため、アメリカ人となっていたジョセフ＝ヒコにも接近したのである。長州藩が、鳥羽・伏見の戦いなどで10倍以上の兵力を持つ幕府軍を破ったのは、ジョセフ＝ヒコの斡旋により、新式の武器を輸入できたわけで、このことを伊藤は恩義を感じていた。

つまり、南北戦争の終結と明治維新の成功は関連があり、この点において、世界の歴史と日本の歴史がつながるのである。ジョセフ＝ヒコは、それを身をもって体験した歴史の証人である。

### (3) ジョセフ＝ヒコのアイデンティティについて

ジョセフ＝ヒコは、前述のように、日本で生まれ育ち、13歳からアメリカで過ごし、22歳で日本に戻り、61歳で日本で没する。この中で、アメリカ人の家庭で暮らし、アメリカで学校教育を受けたことは、彼のアイデンティティの形成に大きな影響を与えたと思われる。それは、帰国した際に撮影した写真を見るとよくわかる。アメリカに帰化した人物というだけでなく、服装、ポーズ、表情を含めてアメリカ人化し、彼が、アメリカ的な思考を身に付けている様子がうかがわれる。

彼は、横浜や長崎で、アメリカ人やイギリス人などさまざまな外国人と交流し、また外国から入る情報を日本人に伝える新聞を発行したり、長州藩にアメリカの武器を輸入したりするなど、いわば「国際人」として活躍した。この頃の彼のアイデンティティは、国際人であった。

しかし、のちに、彼は仕事から引退すると、着物を着て暮らすようになった。そして、多くの日本人が文明開化によって似非西洋人化していくのを苦々しく思っていたようである。それは、日本人の西洋人化が、外見的なものにとどまり、キリスト教的道徳心などの内面的なものまでは、身に付けることができず、却って、以前の伝統的な日本の良さまで失ってしまったことに失望したからだと言われている。

その結果、ジョセフ＝ヒコは、晩年、日本への再帰化を望むようになった。濱田銀子という女性と結婚し、自ら「濱田彦蔵」と名乗るようになった。おそらく、その時点までには、完全

にアイデンティティは完全に日本人に戻っていたのではないだろうか。しかし、当時の日本には、まだ国籍に関する法律が整備されてなく、再帰化が法制化されるのは、彼の死の2年後である。この結果、彼は、外国人墓地に葬られることになる。彼の墓石には、英語で“Joseph Heco”，日本語で「浄世夫彦」と名前が刻まれている。また、裏側には、キリスト教徒となっていたにもかかわらず「高智院法憧浄弁居士」という戒名が刻まれている。

#### IV. 教材開発の実際——小単元「最初の日系アメリカ人ジョセフ＝ヒコ」教授書

##### 1. 対象教科とその位置づけ

高等学校地理歴史科世界史B

高等学校学習指導要領（平成21年3月改訂）

地理歴史科世界史B・内容（1）「世界史への扉」

イ. 「日本の歴史と世界の歴史のつながり」

##### 2. 単元の目標

###### （1）能力目標

- ①グローバルな移動を経験した歴史上の人物の事績を学ぶことで、世界の歴史と日本の歴史の関連付ける歴史の見方・考え方を育成する。
- ②グローバルな移動を経験した歴史上の人物の心情に共感することで、現代社会におけるグローバルなヒトの移動における課題を認識する力を育成する。

###### （2）知識目標

###### a. 概念的知識（歴史の見方・考え方）

- ①グローバルな移動を経験した人物は、世界の歴史と日本の歴史をつなぐような体験をすることがある。
- ②グローバルな移動を経験した人物は、国際人としての心情を持つが複雑なアイデンティティを持つことがある。

###### b. 説明的知識（歴史事象についての解釈）

- ①江戸時代末期、播磨国に生まれた彦太郎は、13歳の時、乗船していた船が難破・漂流し、救助されてアメリカ合衆国に滞在し、洗礼を受けジョセフ＝ヒコと名乗り、英語を身に付けるなどの教育を受けた結果、アメリカ人的な心情を身につけた。
- ②キリスト教徒となっていたジョセフ＝ヒコは、鎖国政策が続いていた日本に帰国するに際して、咎めを受けるのを避けるために、アメリカに帰化して市民権を取得し、最初の日系アメリカ人となった。
- ③アメリカ人として帰国したジョセフ＝ヒコは、開国後に設けられていた横浜村の外国人居留地に住み、駐日アメリカ領事の通訳などをしていたが、攘夷運動の対象となり、アメリカに戻り、南北戦争の最前線を体験する。
- ④外国人居留地で商社を経営したり海外の情報を知らせる新聞を発行するなど、国際人的な心情を発揮した。
- ⑤アメリカで南北戦争が終結して武器が供給過剰になった武器を、ジョセフ＝ヒコが長崎で貿易商として斡旋して、倒幕を計画していた長州藩が輸入し、明治維新の成功に貢献するとともに、明治政府の中心人物である伊藤博文らの知遇を得た。
- ⑥晩年のジョセフ＝ヒコは、日本人としての心情が増し、濱田彦藏と名乗り、日本に再帰化することを願ったが、国籍法が整備されていなかったために叶わず、死後は外国人墓地に葬られた。

## 3. 授業計画

教師の指示・発問	教授・学習活動	資料	生徒の応答・学習内容
<p>(パートⅠ：アメリカ人ジョセフ＝ヒコの誕生)</p> <p>○東京・青山の外国人墓地にあるこの墓は、誰のものか？墓石の文字を読み取ろう。</p> <p>○この墓の人物の名前は、なぜ、アルファベットと英語で書かれているか？</p> <p>◎このジョセフ＝ヒコは、日本人らしいが、なぜ、外国人墓地に葬られたのか？また、どんなことを経験し、どんな心情を持ったか？</p>	<p>T：指示する P：読み、発表する</p> <p>T：発問する P：答える</p> <p>T：この単元の中心課題を提示する</p>	①	<p>・「浄世夫彦」「Joseph Heco」という人物で、1837年から1897年まで生きた。</p> <p>・分からない。</p>
<p>○ジョセフ＝ヒコが日本生まれの日本人だとすると、なぜ、そのような名前となったと考えられるか？</p> <p>○彼が若い時は江戸時代であるが、その時代に簡単に外国人になれたか？</p> <p>○自らの意思で外国に出られないとすると、外国に行くには他にどんな可能性があるか？</p> <p>○年表を見て、彼がアメリカ人になった経緯を調べよう。</p>	<p>T：発問する P：予想する</p> <p>T：発問する P：答える</p> <p>T：発問する P：予想する</p> <p>T：年表を配布し、指示をする P：調べる</p>	②	<p>・帰化をして外国人になった。</p> <p>・江戸時代は、鎖国をしていて、日本から外国に行くことは禁じられていたので、簡単に外国人になることはできない。</p> <p>・船に乗っていて難破し、漂流した結果、外国に着く可能性がある。</p> <p>・1837年：播磨国（現在の兵庫県）阿閉村古宮に生まれる。</p> <p>・1850年：船乗りになり、乗った船が嵐のため難破・漂流し、アメリカ船に救助され、サンフランシスコに上陸する。</p> <p>・1853年：サンダース氏の事務所に就職する。</p> <p>・1854年：サンダース氏の世話で、ワシントンに移り、学校に入学し、カトリックの洗礼を受ける。</p> <p>・1858年：日本への帰国を前にして、サンダース氏の勧めでアメリカ国籍に帰化する。</p> <p>・13歳で日本を離れたが、故郷や日本のことを忘れることはないで、日本人としてのアイデンティティを持っていた。</p> <p>・ジョセフ＝ヒコが、鎖国中の日本に帰り、罰せられることを恐れていたため、アメリカ人となっていれば、アメリカ政府の役人が保護をしてくれると思ったから。</p> <p>・ジョセフ＝ヒコが、最初の日系アメリカ人である。</p>
<p>○アメリカ滞在中のジョセフ＝ヒコのアイデンティティはどのようなものだったと思われるか？</p> <p>○サンダース氏は、なぜ、帰化を勧めたと思うか？</p> <p>○それ以前に、アメリカに帰化した日本人はいたか？</p>	<p>T：発問する P：予想する</p> <p>T：発問する P：予想する</p> <p>T：発問する P：答える</p>		<p>・日本に帰国できるのはうれしいが、4年余りアメリカの教育を受けてアメリカ的な考えを身に付けた自分が、江戸幕府をはじめとして日本人たちからどんな扱いを受けるか不安であったと思われる。</p>
<p>(パートⅡ：幕末の日本とジョセフ＝ヒコ)</p> <p>◎日本に戻ったジョセフ＝ヒコは、日系アメリカ人としてどのような経験をしたか？</p>	<p>T：パートⅡの学習課題を提示する</p>		
<p>○ジョセフ＝ヒコが戻った1859年の日本は、どのような状況だったか？</p>	<p>T：発問する P：答える</p>		<p>・幕府が勅許を得ないで、日米修好通商条約を結んだため、攘夷運動が盛んになっていた。</p>



○日米修好通商条約はどんな内容か？	T：発問する P：答える	③	・日米修好通商条約が結ばれ、5港（横浜、箱館、兵庫、長崎、新潟）が開かれ、江戸と大坂での商取引が認められたが、外国人は居留地と行動範囲は制限された。また、領事裁判権が設定された。
○ジョセフ＝ヒコは、どのような立場で日本に帰ったか？幕府はどのように彼に接したか？	T：発問する P：答える	④	・アメリカ人で駐日アメリカ公使ハリスに通訳として雇われ日本に帰ったので、外国人としての立場だった。外国に渡航した日本人として取り調べたり、罰したりしなかった。 ・外国人であるジョセフ＝ヒコは、行動範囲は限られ、故郷に帰ることはできなかった。
○日本に戻ったジョセフ＝ヒコは、故郷の播磨国・古宮村に戻ることができたか？	T：発問する P：答える	⑤	・日本人は、洋装したジョセフ＝ヒコに対し外国人として接し、他の外国人と同様に攘夷の対象とした。危険を感じたジョセフ＝ヒコは、アメリカに再渡航した。
○日本人はジョセフ＝ヒコにどのように接したと思われるか？その結果、ジョセフ＝ヒコは、どのような行動をとったか？	T：発問する P：答える	⑥	・貿易のやり方や、黒人奴隷制度を巡って南北の州が対立した結果、南北戦争が始まっていた。
○ジョセフ＝ヒコが戻った1861年のアメリカはどのような状況だったか？	T：発問する P：答える	⑦	・ワシントンで、リンカン大統領に会見した。南軍のスパイと間違われ、一時、北軍に拘束された。
○ジョセフ＝ヒコは、アメリカでどのような経験をしたか？	T：発問する P：答える	⑧	・領事の通訳を辞めた後、貿易会社を立ち上げて茶の輸出をしたり、日本で最初の新聞『海外新聞』を発行したりした。
○再び日本に戻ったジョセフ＝ヒコは、外国人居留地の横浜でどんなことをしたか？	T：発問する P：答える	⑨	・海外から送られてくる新聞から記事を選んで翻訳した。
○『海外新聞』はどんなものだったか？	T：発問する P：答える		・海外の情報を日本人に日本語で知らせることが重要だと思ったから。
○ジョセフ＝ヒコは、なぜ、新聞を発行しようと考えたと思うか？	T：発問する P：予想する		
◎日本に戻ったジョセフ＝ヒコはどのような経験をしたか、どんな心情をもつに至ったか、まとめてみよう。	T：発問する P：まとめる		・ジョセフ＝ヒコは、アメリカ人として帰国し、アメリカ領事館の通訳をしたため、攘夷運動の対象となり、いったん渡米したが、再び帰国し横浜の外国人居留地に住んだ。海外の情報を日本に紹介する新聞を発行するなど、国際人としての心情を持っていたと考えられる。
〈パートⅢ：明治維新とジョセフ＝ヒコ〉 ◎ジョセフ＝ヒコは、明治維新においてどのような経験をしたか？	T：パートⅡの学習課題を提示する		
○1866年に横浜から長崎に移ったジョセフ＝ヒコは、何をしたか？	T：発問する P：答える	⑩	・グラバー商会の下で、長州藩や薩摩藩の求めに応じて、アメリカから武器を輸入した。
○なぜ、武器の輸入が比較的簡単にできたと思うか？	T：発問する P：予想する	⑪	・ジョセフ＝ヒコが、英語を話し、アメリカの商業取引に精通してためと、アメリカの南北戦争が終了して、武器の供給が過剰気味であったため。
○伊藤博文や木戸孝允と知り合いになったことで、明治維新後にどのような経験をしたか？	T：発問する P：答える	⑫	・伊藤や木戸は、明治政府の指導的立場にあり、その知遇を得ていたことで、大阪造幣局開設や国立銀行条例編纂に明治政府の仕事をしたり、故郷の播磨に帰ることができた。
○故郷の播磨に帰った時、ジョセフ＝ヒコは、どのようなことを感じ、どのようなことをしたか？	T：発問する P：答える	⑬	・故郷の村が想像したよりも貧しく見え、同行したアメリカ人に対し恥ずかしさを覚えた。また、両親の墓を建てた。
○晩年のジョセフ＝ヒコは、どのような暮らしをしたか？	T：発問する P：答える		・着物を着て暮らすなど、日本人としての心情が増し、濱田彦蔵と名乗り、自らの

○ジョセフ＝ヒコが、死後、外国人墓地に葬られたのは、なぜか？	T：発問する P：答える	体験を『自伝』としてまとめた。 ・日本に再帰化することを願ったが、国籍法が整備されていなかったために叶わず、外国人墓地に葬られた。
◎現代においてもジョセフ＝ヒコのように、外国に暮らして国籍を変更する場合があるが、そのような人が、どんな経験をするか、また、どんなアイデンティティを持つか、考えてみよう。	T：指示する P：まとめる	

資料①東京・青山の外国人墓地にあるジョセフ＝ヒコの墓の写真（2点：全体像（左）とアルファベットの墓碑名を拡大したもの。筆者撮影。）。



②ジョセフ＝ヒコの略年表（『自伝2』の年譜より筆者が抜粋し作成したもの）。③日米修好通商条約。④「合衆国公使は、この私が日本生まれではあるが、今は帰化してアメリカ市民となっていることを神奈川奉行に通告した。公使は、私をアメリカ人として取り扱うように要請し、奉行は講師の養成を記録した。」（『自伝1』170頁）⑤1862年頃の撮影した洋装のジョセフ＝ヒコの写真（『自伝1』口絵より）。⑥および⑦年表。⑧『海外新聞』の写真（『自伝1』口絵より）。⑨『自伝2』65頁。⑩および⑪年表。⑫「何たる幻滅!!家々は見すばらしく、低く、見かけもあさましいと言ってよいくらい、子どものころ大きかった街路も、どこにもある普通の道ではないか。」（『自伝2』152頁）⑬『年表』

## V. 結論にかえて——授業の実践・評価・分析——

授業の実践は、京都府立嵯峨野高校で行った。嵯峨野高校には、「京都こすもす科」という特別の教育課程があり、その目的等がウェブサイトで次のように紹介されている<sup>10)</sup>。

京都こすもす科の専門科目に関わる内容について、自ら学び、調べ、考察することを通じて、大学や社会で何を研究し専門としていくかについて考えるきっかけとし、同時にその基礎づくりを行うことを目的とするものです。今年

度は、開講講座を一新し、合わせて10のラボを展開しています。各自の興味・関心や将来の進路希望などをもとに選択し、1年間研究します。1年間の成果を各自レポートを作成したり、プレゼンテーションすることで研究をより確かなものにしていきます。各ラボでは大学の先生や企業の方からの特別講義（アカデミック・レクチャー）の実施や、ラボによってはフィールドワークを実施する予定です。

今回の授業実践は、10のアカデミックラボのうちの歴史学講座でその内容も、同じくウェブサイトで、次のように紹介されている。

## 講座名 歴史学

中学校で学習した歴史事象を、中学校ではあまり触れられることのなかった視点から見直すことによって、歴史学の持つ面白さについて学習します。特に、中学校で学習した歴史事象の中から日本史という空間・システムと世界史という空間・システムの接点に注目したいと思います。その接点を見出すには、とらわれのないまなざしや常識化した歴史の概念や時代像を疑うことが必要です。視点や視座をずらして、多様な観点から歴史を見ることによって、日本史と世界史との意外な接点がち現れることでしょう。フィールドワークにおいては、身近な地域から世界史と日本史の接点を読み解きたいと思います。

「日本史という空間・システムと世界史という空間・システムの接点に注目したい」という設定は、まさに、今回の教材開発による授業を実践する場として適切である。この歴史学講座を受講している生徒は、高校1年生の10名であり、歴史に関して興味・関心を強く持っている。しかし、彼らの歴史についての知識は中学校歴史的分野の内容でとどまっているものと思われる。

今回の授業は、2010年10月29日に行った。時間は50分である。このため、前時にこの講座を担当する地理歴史科の川口靖夫教諭にパートⅠの前半（年表を配布してジョセフ＝ヒコがアメリカ人になった経緯を調べるまで）の授業をしていただき、筆者はパートⅠの残りとして、パートⅡとパートⅢを一部省略しながら行った。なお、授業後に、生徒には感想文の提出が課題として与えられ、川口教諭に回収の上、送付していただいた。

ここでは、能力目標として掲げた「①グローバルな移動を経験した歴史上の人物の事績を学ぶことで、世界の歴史と日本の歴史の関連付ける歴史の見方・考え方を育成する」と「②グローバルな移動を経験した歴史上の人物の心情に共感することで、現代社会におけるグローバ

ルなヒトの移動における課題を認識する力を育成する」が達成されたかを、感想文を分析することで、授業を評価してみたい。なお、生徒の名前は記さず、イニシャルを付した。

まず、多くの生徒が、この授業で初めてジョセフ＝ヒコのことを知ったと述べ、また興味関心を持ったと記している。代表的なものをあげると、次の3名の感想である。どれも、ジョセフ＝ヒコの存在を初めて知ったことが記されている。また、漂流してアメリカに渡った人物として、ジョン万次郎と比較しているものも、共通している。

私は日系アメリカ人という存在をあまり知りませんでした。ジョン万次郎などの伝記はもちろん読んでいたのですが、しっかりと記憶をしてはいません。そして、今回この話をしてもらって初めてジョセフ＝ヒコという人を知りました。(K・M)

私はこの授業をうけるまでジョセフ＝ヒコという人の存在を知りませんでした。この授業をうけてジョセフ＝ヒコという人は本当にいろいろなことをした人だったとわかりました。ジョン万次郎という人のことはけっこう名前をきいたことがあったけど、ジョセフ＝ヒコはせんぜん名前がしられていないと思うのでかわいそうだなと思います。(T・M)

私は歴史の中で知った日系アメリカ人といえば、ジョン万次郎くらいしか聞いたことはなかったのですが、川口先生や田中先生のお話を聞き、ヒコが教科書に載っていないのが不思議なくらい、彼は面白い人生を送っていたのだなと思いました。海での難破や日本語も通じず、英語もまだ十分に通じないアメリカでの生活は、きっと私たちが考えるよりも不安と困難でいっぱいだったでしょう。ですがアメリカで様々な経験をし、情報や外国の文化、また、自身が学んできた英語を日本へ持ち帰り、幕末や明治の日本に大きな影響を及ぼしたという事にすごく興味が湧きました。また、遭難から成功までのストーリーや出会った人物も本当に凄かったです。(M・N)

以上の3例のうち、M・Nは、初めて知ったという延長上に、ジョセフ＝ヒコが、アメリカでリンカンなどの大統領と会ったこと、日本で新聞を創始したこと、幕末・明治維新に大きな影響を及ぼしたことに興味を持ったことを記している。

しかし、残念ながら、①の世界の歴史と日本の歴史の関連性について記述した生徒はいなかった。これはおそらく、彼らが高校1年生であり、世界史の知識が中学校歴史的分野でとどまっているため、南北戦争の世界史上の内容や意義についての十分な認識がないせいであろう。

一方、ほとんどの生徒が②のジョセフ＝ヒコの心情に共感した記述を行っている。代表的なものをあげると、次の3名の感想である。これらからは、授業を受けながら、生徒たちが、ジョセフ＝ヒコの心情に寄り添っていったことが分かる。特に、日本人に戻りたいと思っていたジョセフ＝ヒコに共感するとともに、本人が晩年にその生涯をどのように評価していたのかが気になるようである。

講義を聞いて印象に残っていることは、もちろんヒコという人物がなしとげたことの凄さもありますが、やはり私の中で一番印象にのこったのはヒコの最期です。帰化した後で、日本人に戻りたいと思ったけれど、法の壁があって日本人に戻れずそのまま外国人墓地にアメリカ人として亡くなった、ヒコの日本人に戻りたいという気持ちは、本当に強いものだったのだなあと胸がしめつけられる思いでした。亡くなってから2年でその法律が作られたというのも、あともう少しなのにと残念です。(K・Y)

言葉もわからないアメリカで暮らしていくために否応なくアメリカ人になり、名前を変え、宗教を変えて、ふと気がつけば日本人だといえる部分がなくなっていた。というのが実際のところだったと想像すると、落ちついてから自分の意志で元の国籍に戻りたいと思うのも全く驚くことではないだろう。また、彼の死後二年しか

たらずに国籍法が定められたという話を聞くと、余計にヒコが当時自分の境遇をどう思っていたのかということが気になった。私たちは後世から歴史の全体をみているからそのような事実も知っているし、最初の日系アメリカ人としてのヒコの生涯を見ることもできるけれど、当時その渦中において実際に生きていた本人は自分の生涯をどう感じていたのか、と考えると不思議な感じがする。(M・S)

ヒコは、人生のほとんどを日本とアメリカを行き来し、「ジョセフ＝ヒコ」という名もつけられ、自分がアメリカ人となることに違和感を持ったりしなかったのかと思う。そして、外国人として日本の墓地に葬られたことについて、どう思うのか。(M・C)

もう一点取り上げるとすれば、生徒の感想の中で、ジョセフ＝ヒコの周囲の日本人の気持ちを推し量ろうとするものがある。これは、この生徒が、歴史的な場面を想像した結果であり、教材を開発した者の意図を超えるもので、嬉しい誤算ともいえる。

ヒコが日本に帰ってきてからの話では、出会った日本人々は、ヒコのことをどう思っていたのだろう、と思った。今では私たちにも「帰化」「国籍」「日系アメリカ人」という概念があるけれど、当時は国籍法すらなく、ヒコが最初の日系アメリカ人だったのだということを考えると、当時の日本人にとっては、「日本人だったがアメリカ人になった」というヒコの状況がとても奇妙で、よくわからないと思えたりはしなかっただろうか。そうしたことが何となく気になる。顔立ちや出身からやはり日本人だと思っていたのか、それとも異質なところの方が目立って日本人とは思えなかったのか、その頃の感覚は知りようのないものだけれど、知れるものなら知りたいと感じた。(M・S)

以上のように生徒の感想文の内容が、初めて知ったジョセフ＝ヒコという人物の心情に偏ったのは、外国人墓地にあるジョセフ＝ヒコの墓の写真を単元の導入をして用いたからであると



思われる。「なぜ日本人であるジョセフ＝ヒコが外国人墓地に葬られたのか？」という疑問から、生徒は50分の授業を通じて「本人は、日本人に戻りたいと思っていたのに可哀そうだ」という心理に転じていったのだろう。その意味で、「世界の歴史と日本の歴史をつなぐ」が1つの目的である授業としては、失敗であったが、「グローバルな移動を経験した人物は、国際人としての心情を持つが複雑なアイデンティティを持つことがある」という概念的知識の獲得目標は達成できたと思う。

再び、実践を行う機会があれば、南北戦争の内容と意義と、ジョセフ＝ヒコが長州藩の武器輸入に貢献したことをより強調することで、「世界の歴史と日本の歴史をつなぐ」授業をめざしたい。また、そのほかの「世界の歴史と日本の歴史をつなぐ」事例の教材開発にも取り組みたい。

[付記：本稿は、平成22年度科学研究費基盤研究(C) (課題番号21530998) による研究成果の一部である。]

## 注

- 1) ジョセフ＝ヒコの生涯についての文献としては、まず、本人が執筆した自伝が基本になる。これは、英語で書かれたもので、原題は *The Narrative of a*

*Japanese ; What he has seen and the people he has met in the course of the last forty years : 2vols.* である。この上下2巻のうち、刊行年代がはっきりしているのは下巻の1895年である。本稿の執筆において今回利用したのは以下の3書である。この自伝の翻訳書である中川努・山口修訳『アメリカ彦蔵自伝(1・2)』(東洋文庫13・22)』平凡社、1964年。この自伝を分析・検証し、ジョセフ評伝として刊行された、近盛晴嘉『ジョセフ＝ヒコ(新装版)』吉川弘文館、1986年。吉村昭『アメリカ彦蔵(新潮文庫版)』新潮社、2001年。本稿で記述した彼の事績については、特に断らない限り、この3書を参考とした。なお、Heco という表記は、ヒコという発音に合わせて彼自身が考えたものとされ、まだ、日本語をへボン式ローマ字が開発される前であることを示している。

- 2) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説地理歴史編』教育出版、2010年、2頁。
- 3) 同書、3頁。
- 4) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説地理歴史編』実教出版、1999年、4頁。
- 5) 文部科学省『高等学校学習指導要領』2009年、33-35頁。
- 6) 拙稿「中学校社会科歴史的分野における世界史事象の削減について—新しい『中学校学習指導要領』の分析から—」『広島経済大学研究論集』第22巻第4号、39-48頁。
- 7) 我が国の歴史教育の歴史については、社会認識教育学会編『地理歴史科教育』学術図書出版、2010年、6-15頁を参照。
- 8) 『アメリカ彦蔵自伝(2)』巻末の年譜より抜粋、加筆して作成した。
- 9) 『アメリカ彦蔵自伝(1)』、270頁。
- 10) <http://www1.kyoto-be.ne.jp/sagano-hs/contents/jinkoku/index.html>